

# 文献と造像にみる弁才天と仏・菩薩・神との習合

——江島縁起を起点に——

田中 亜美

## 一、はじめに

弁才天<sup>〔1〕</sup>は、インドの河や弁舌の神であるサラスヴァティーが仏教に取り入れられたものである。弁才天の姿は、『金光明經』やその異訳『金光明最勝王經』等に拠る八臂像と、『大日經』に基づく胎藏曼荼羅での二臂像<sup>〔2〕</sup>とを基本とするが、日本では中世以後、疑偽經典に拠る宇賀弁才天像が多く造られた。像の変遷と並んで、弁才天と他の仏・菩薩・神との習合が進み、各地の寺社や霊山にまつわる縁起にも、弁才天と他尊との習合が説かれた。その一例が江島縁起である。

真名本『江島縁起』を始めとする江島縁起諸本は、高僧たちが江の島を訪れ、弁才天の顕現を拝したことを説く。その中で弁才天の本地仏が明かされるが、一つの縁起の中でも場面ごとに異なる本地が説かれる。また、諸本間でもそれぞれの場面で明かされる本地に若干の異同がある。これは何を意味するのであろうか。

弁才天信仰及び弁才天像に関する研究は数多いが、近年の網羅的な研究としては、まず鳥谷武史氏<sup>〔3〕</sup>のものが挙げられる。鳥谷氏は日本における弁才天像を分類したうえで、特に宇賀弁才天、さらに天川の十臂弁才天について儀軌と比較しながら詳細に分析する。さらに、江島縁起を「弁才天像の変革期における信仰」が表れたものと位置づけて内容を分析し、縁起諸本に見える弁才天の姿についても論じる。田中貴子氏<sup>〔4〕</sup>は中世の説話集や本地物に見える弁才天・龍女・吉祥天について、女身の力を發揮するものとして共通の役割を果たしたり、ときに「姉妹」として連環を成すことを指摘する。

宇賀弁才天信仰については、山本ひろ子氏の研究が画期といえる。『溪嵐拾葉集』を起点に、比叡山における宇賀弁才天信仰について、疑偽経典や儀軌の説を引きながら論じる。宇賀神が持つ蛇体の意味や、愛染明王との関連など、宇賀弁才天信仰の特異な説について考察している。また宇賀弁才天信仰を圖像の面から扱ったものとしては、中島彩花氏の一連の研究がある。中島氏は天川弁才天曼荼羅・日吉山王曼荼羅に描かれた弁才天の姿を、東密・台密の教説から論じる。

筆者はこれまでに、『注好選』『今昔物語集』に見える弁才天と堅牢地神の同体説に着目し、弁才天・功德天・堅牢地神が同体とされたことについて論じた<sup>7)</sup>。先行研究でも、弁才天・宇賀神と、龍女・荒神・ダキ二天・大黒天などとの同体説には触れられている。しかし、中世の日本において、各地に祀られた弁才天の本地に、どのような仏・菩薩が配当されていたかについては未だ十分に考究されていない。この問題に取り組むことで、弁才天が祀られたそれぞれの場において、どのように固有の信仰が形成されていったのか、あるいはどのように信仰が伝播したのかを解明することに繋がる。小稿では、江島縁起を起点として、弁才天と諸仏・菩薩との習合および同体説について、文献と造像例から検討する。また、江島縁起に見える釈迦・阿弥陀との習合について、『溪嵐拾葉集』などの記述と比較し、その成立背景を明らかにしたい。

## 二、江島縁起諸本における弁才天と他尊の習合

### 二一、江島縁起諸本

江島縁起の主な諸本には、真名本・仮名本の二系統と、『溪嵐拾葉集』所収の江島縁起がある。いずれにおいても、島の出現と弁才天の鎮座は以下のように語られる。

江の島の出現以前、深沢という大きな湖があり、五頭龍が棲んで人々を苦しめていた。あるとき弁才天が天女の姿で出現し、眷属たちと共に江の島を造る。そこに降りた弁才天を見て五頭龍は愛欲を抱くが、弁才天は龍を拒絶する。龍が弁才天の教えにより悪業を止め仏法を護持することを誓うと、弁才天は龍を受け入れる。この弁才天が江島明神

であり、その後龍は龍口山となる。

これに続いて高僧たちの来島が語られるが、その内容と順序には諸本間で異同があり、後掲「表1」に示した。諸本の詳細な書誌は、拙稿を参照されたい。

小稿では以下の諸本について、弁才天と他の仏・菩薩・神との習合が説かれる箇所を比較する。

#### ○真名本系統

諸本中最古にあたる、元亨三年（一三三三）の奥付を有するものとして、金沢文庫保管『相州津村江之島弁財天縁起』がある。ただし落丁が大きく、残存する文は次の【真名本】と同じであるため、小稿では比較対象から除いた。

#### 【真名本】江島神社蔵『江島縁起』（漢文）

奥書には応永二十年（一四一三）に旧本から書写されたこと、さらに享録四年（一五三一）に転写されたことが見えるが、さらに転写を経た可能性があり、写本年代は江戸時代とも考えられている。

#### ○仮名本系統

#### 【岩本院本】岩本楼蔵『江島五卷縁起』（漢字仮名交り）※絵巻物

絵巻としては最古のもので、画風から室町時代の成立と推定される。<sup>⑩</sup> 詞書は真名本を踏まえ、その上で多くの修飾を加えている。

#### 【江島神社本】江島神社蔵『江島縁起』（漢字仮名交り）※絵巻物

江戸時代の作と考えられる。詞書は岩本院本とほぼ同文で、ほとんどが仮名表記になっている。

#### 【上之宮縁起】江島神社蔵『相州得瑞島上之宮縁起』漢字仮名交り文 一卷

構成は岩本院本・江島神社本と概ね共通するが、『先代旧事本紀』や宇賀弁才天信仰を記す疑偽經典の引用、『太平記』に見える北条時政の逸話を記すことなど、他本と異なる特徴も多い。写本年代は江戸時代中期以降と推定される。<sup>⑪</sup>

#### ○溪嵐拾葉集

#### 【溪嵐拾葉集】『溪嵐拾葉集』卷三十七「弁財天縁起」江島縁起事

文献と造像にみる弁才天と仏・菩薩・神との習合



二一、江島縁起諸本における弁才天の本地・習合関係

〔表1〕では、弁才天の本地説や習合関係が窺える場面を灰色で示した。以下、a～hのそれぞれの場面について、諸本の本文を掲げ、語句の典拠および用例を①～⑫として適宜引きながら、弁才天の本地は何とされているか、またどのような仏・菩薩・神が弁才天と結び付けられているかを確認する。なお、江島神社本は岩本院本とほぼ同文のため、ここでは割愛した。また上之宮縁起についても、記述の内容が岩本院本とほぼ同じ場合は省略した。

a 島の成立・悪龍教化

〔真名本〕是即弁才天女之応作、無熱池龍王之第三之娘也。

〔岩本院本〕これ弁才天女の応作、無熱池龍王第三の娘、閻羅大王の姉、婆蘇大天の妹也。

〔上之宮縁起〕又夫天女の因縁をとふらへは、往劫より天におゐて八日輪の中に在て、四州の暗をてらし、地に於は阿那婆龍王の女と成て龍福を世界にほどこし、仙境に於ゐてハ婆蘇仙王の妹と成て不老不死の益をなし、冥府に於は閻羅法王の姉と成て天を除寿をあたふ。

〔溪風拾葉集〕右に相当する文なし。

真名本・仮名本は、弁才天を無熱池龍王（阿那婆龍王）の娘とする。特に上之宮縁起以外はいずれも、ただ娘とするだけでなく、第三の娘とする。無熱池龍王（阿那婆龍王）は八大龍王の一体に数えられる。（龍王の三女）は日本中世の説話に数多く登場するが、これは『法華経』に説かれる娑竭羅龍王の娘を原型とする。

①『法華経』卷四・提婆達多品〔大正九一三五中〕

文殊師利言、有娑竭羅龍王女。年始八歳、智慧利根善知衆生諸根行業。

『法華経』において女人・畜類・年少でありながら成仏したことが説かれるこの龍女が、日本において様々な女神と習合し、あるいはその姉妹として結びつけられていったことは既に田中貴子氏が指摘している。例えば、長門本『平家物語』卷五・厳島明神事では、厳島明神を娑竭羅龍王の三番目の娘であり、姉に『法華経』提婆達多品の龍女と神功皇后を持つとする。中世の陰陽道書である『篋篋内伝』などに見える牛頭天王の説話でも、牛頭天王の妃となる頗梨采女は娑竭

羅龍王の三女だとされる。巖島明神も頗梨采女も、龍女とされると同時に弁才天との同体説が説かれる神である。江島縁起もこれを踏襲するものと考えられるが、弁才天を婆竭羅龍王ではなく無熱池龍王の娘とするのは珍しい。これは、空海に仮託された『御遺告』において、空海が神泉苑で祈雨法を行ったとき出現した善如龍王が、無熱池に棲む龍王だとされることに拠るものである<sup>14)</sup>。真名本系統に見える〈閻羅大王の姉〉〈婆蘇大天の妹〉は、『金光明最勝王經』の弁才天を讃える偈頌に由来する。

② 『金光明最勝王經』卷八・大弁才天女品「大正一六一四三七上」

敬礼天女那羅延、(中略) 現為閻羅之長姉、常著青色野蚕衣、好醜容儀皆具有、眼目能令見者怖。(中略) 或現婆蘇大天女、見有鬪戰心常慙。

上之宮縁起にある「日輪の中に在て四州の暗をてらし」は、宇賀弁才天関係の疑偽經典『仏説最勝護国宇賀耶頓得如意宝珠陀羅尼經』に拠るものである。

③ 『仏説最勝護国宇賀耶頓得如意宝珠陀羅尼經』(『校訂仏説弁財天經』、永田文昌堂、一九三七・六)

此神王、在西方淨刹、号無量寿仏、在娑婆世界、称如意輪觀音、正生身体、居日輪中、照四州閻、現陀枳尼天形、福寿施衆生、現大聖天身、令弘二世障難、以愛染明王形、一切衆生、授愛福、終令至無上菩提。

③では宇賀神王(宇賀弁才天)と阿弥陀仏・如意輪觀音・天照大神・ダキニ天・聖天・愛染明王が同体と説かれる。上之宮縁起ではこのうち、弁才天と天照大神との同体説を引用していることになるが、上之宮縁起は全編を通じて弁才天と天照大神の同体説を説いており、これもその一端である。

b 役行者来島

【真名本】役優婆塞、俗姓加茂氏、大和国葛城郡茅原村人也、(中略) 応時忽然天女現前化現、々質八臂之尊体也。容

儀白淨鮮潔猶秋月。発妙音言説、從無量劫来成就善方便。普濟苦衆生。多所大饒益。於茲行者歡喜合掌、重請求加被。天女言、我収化於鷲峰、垂跡於此島。当知、擁護国王及人民、為下除衰患、令上得

安穩<sup>一</sup>也。汝為<sup>三</sup>利益長夜<sup>一</sup>故、願<sup>レ</sup>求我化現<sup>一</sup>。實是大悲者。

【岩本院本】むかし役居士といふ人あり、(中略)天女忽然として現し給へり、八臂具足の尊体也、身色容儀鮮白淨潔なり、すなはち妙音もちてのたまはく、從<sup>二</sup>無量劫來<sup>一</sup>成<sup>二</sup>就善方便<sup>一</sup>普濟<sup>二</sup>苦衆生<sup>一</sup>多所大饒益。行者歡喜合掌してかさねて利益の議をとふに、天女の言、我化を鷲峰にをさめて、跡をこゝにたれたり。まさにしるへし、國王人民を擁護して、衰惱をのそぎ、安穩をえしめんためなり。汝長夜を利益せむかために、わか化現をもとむ。まことにこれ大悲者なりと。

【上之宮縁起】記述内容は岩本院本に同じ。

【溪風拾葉集】次役行者伊豆大島<sup>一</sup>流サレテ御座時<sup>二</sup>、彼島上<sup>二</sup>五色ノ雲鬘<sup>ス</sup>。具<sup>シテ</sup>二童子<sup>一</sup>籠<sup>テ</sup>被<sup>レ</sup>行<sup>レ</sup>之。六臂ノ天女乗<sup>レ</sup>亀具<sup>シテ</sup>童子<sup>一</sup>。我常<sup>二</sup>靈山<sup>一</sup>有也<sup>二</sup>「云云」。

弁才天が役行者に語る「擁護國王及人民<sup>一</sup>、為<sup>レ</sup>除<sup>二</sup>衰患<sup>一</sup>令<sup>レ</sup>得<sup>二</sup>安穩<sup>一</sup>」は、『金光明經』に典拠がある。

#### ④『金光明經』卷二・四天王品「大正一六一三—四一上」

世尊。如<sup>二</sup>諸國王所有土境<sup>一</sup>、是持<sup>レ</sup>經者若至<sup>二</sup>其國<sup>一</sup>、是王<sup>下</sup>必<sup>下</sup>當<sup>二</sup>往<sup>一</sup>是人所<sup>一</sup>、聽<sup>レ</sup>受如<sup>レ</sup>是微妙經典<sup>一</sup>、聞已歡喜<sup>上</sup>、復當<sup>レ</sup>護<sup>二</sup>念恭敬是人<sup>一</sup>。世尊。我等四王、復當<sup>下</sup>勤<sup>心</sup>擁<sup>護</sup>是王及國人民<sup>一</sup>、為<sup>レ</sup>除<sup>二</sup>衰患<sup>一</sup>令<sup>レ</sup>得<sup>二</sup>安穩<sup>一</sup>。

四天王が『金光明經』の流布する国において国王・人民を擁護し、禍を除いて安穩をもたらすと説く。本来は弁才天と直接関連する記述ではない。しかし、江島縁起の空海・円仁の来島記事では、国土に災いが起こるとき、弁才天が事前に島を鳴動させて知らせること、またその際に護国經典を誦誦すれば、眷属とともに災いを除くことを語る。弁才天信仰が依拠する『金光明經』から、国土擁護の利益にふさわしい箇所を引用した結果であろう。また真名本・仮名本に「我收<sup>二</sup>化於鷲峰<sup>一</sup>、垂<sup>二</sup>跡於此島<sup>一</sup>」「我化を鷲峰にをさめて、跡をこゝにたれたり」、『溪風拾葉集』には「我常<sup>二</sup>靈山<sup>一</sup>有也」とある。鷲峰とは靈鷲山のこと、釈迦により『法華經』などが説かれた場所である。弁才天が、応化を靈鷲山に収め、跡を江島に垂れるというのは、その本地が釈迦如来だと明かしていることになる。

## c 泰澄来島

『溪嵐拾葉集』のみ、役行者より前に泰澄の記事が置かれ、順序が逆になっている。泰澄来島記事の中に本地を示す説が見えるのは『溪嵐拾葉集』のみである。

## 【溪嵐拾葉集】

武烈天皇御宇、泰澄大師彼島ニ籠テ行ル之。二臂天女ニテ二天具シテ、我常ニ寂光土ニアリト「云云」。

寂光土（常寂光土）は『観普賢菩薩行法経』の次の文にあるように、釈迦如来の住所と考えられる。従ってこの箇所は、弁才天の本地が釈迦如来であるということになる。

## ⑤『観普賢菩薩行法経』〔大正九一三九二下〕

釈迦牟尼名ニ毘盧遮那遍一切処。其仏住処名ニ常寂光。

## d 最澄来島

最澄の来島記事は『溪嵐拾葉集』にのみ存在する。大山寺にあつたとされる原本の江島縁起が、真名本・仮名本とはやや異なる構成を持ったものだと思定される箇所のひとつである。

## 【溪嵐拾葉集】

次伝教大師彼島ニ籠テ被レ行レ之。天女八臂ニシテ具シニ四天ヲ一、我常靈鷲山ニ住セリト「云云」。

役行者来島の記事と同様に、靈鷲山に住するということから、本地を釈迦如来としていることが読み取れる。

## e 空海来島

【真名本】弘法大師、諱空海、讃岐国多度郡人、俗姓佐伯氏、（中略）其体八臂具足、相好光明猶如ニ满月輪、威徳巍々、梵釈左右侍立。自出ニ和音言説、今此三界皆是我有、其中衆生悉是吾子、而今此処多ニ諸患難、唯我一人能為ニ救護、

## 【岩本院本】

嵯峨天皇弘仁五年春二月、弘法大師北京の帝域をいて、東海の聖跡を拜せられる、（中略）綵雲涼雨対して

相好端嚴なり、威儀棣々たり、肅雍穆々たり、月輪円満して梵釈左右に侍立す。みつから和音をいたして曰、今此三界皆是我有、其中衆生悉是吾子、而今此処多ニ諸患難、唯我一人能為ニ救護。

## 【上之宮縁起】

内容および偈文は岩本院本に同じ。

【溪嵐拾葉集】次弘法大師籠<sub>レ</sub>彼島被<sub>レ</sub>行<sub>レ</sub>之。四臂天女持<sub>テ</sub>智劍・如意珠<sub>ヲ</sub>、西方淨土<sub>ハ</sub>教主也<sub>ト</sub>。「云云」。

「今此三界皆是我有 其中衆生悉是吾子 而今此処多<sub>ニ</sub>諸患難<sub>一</sub> 唯我一人能為<sub>ニ</sub>救護<sub>一</sub>」の偈文は、『法華經』譬喩品で釈迦如来が説いたものである。

⑥ 『法華經』卷二・譬喩品「大正九一—四下」

今此<sub>ニ</sub>三界皆是我有<sub>一</sub>、其中衆生悉是吾子<sub>一</sub>。而今此処多<sub>ニ</sub>諸患難<sub>一</sub>、唯我一人能為<sub>ニ</sub>救護<sub>一</sub>。

『延暦寺護国縁起』などに見える比叡山の縁起では、大比叡明神が最澄に本地を問われた際にこの偈文で答えており、これによつて明神の本地を釈迦如来だとする。江島縁起もこれと同様に、弁才天の本地を釈迦如来だと示すためにこの偈文が引かれているものと考えられる。

⑦ 『延暦寺護国縁起』日吉大比叡明神祭礼殊崇重縁起勸文第三（統群書類従）

謹案<sub>ニ</sub>勸山家縁起本紀<sub>一</sub>云、日吉山王大宮権現者大三輪大明神也。而伝教大師当山開闢始、先奉<sub>レ</sub>遇<sub>ニ</sub>大比叡明神家<sub>一</sub>、初問<sub>ニ</sub>明神本迹<sub>一</sub>。于時大神答云。吾此山王、日域冥神、陰陽不<sub>レ</sub>測造化無<sub>レ</sub>為云々。重問<sub>ニ</sub>本地何仏<sub>一</sub>、明神答、今此三界皆是我有、其中衆生悉是吾子。「已上」云々。測知山王釈迦、以<sub>ニ</sub>大願<sub>一</sub>故、於<sub>ニ</sub>大日本国<sub>一</sub>、現<sub>ニ</sub>大明神<sub>一</sub>。右經文其誠<sub>（註之）</sub>謹也。吾朝雖<sub>ニ</sub>諸神多<sub>一</sub>、為<sub>ニ</sub>本地釈迦仏<sub>一</sub>大神、唯限<sub>ニ</sub>日吉大比叡明神<sub>一</sub>也。

⑧ 『山家要記浅略』（統群書類従）

大師問曰、冥神本地如何。神答曰、今此三界皆是我有、其中衆生悉是吾子。

⑨ 『耀天記』（統群書類従）

大宮大明神<sub>ノ</sub>本地<sub>ハ</sub>尺迦如来<sub>ニテ</sub>、今此三界皆是我有、其中衆生悉是吾子<sub>ト</sub>仰<sub>ラ</sub>レタレバ、垂迹<sub>フ</sub>神<sub>ト</sub>顯<sub>ハ</sub>レ給日、<sub>ツカフ</sub>マツラム巫覡<sub>ト</sub>モツバ、御子<sub>ト</sub>專<sub>ラ</sub>申<sub>ス</sub>ベキ也。

これらの用例が⑥『法華經』の偈文から「今此三界皆是我有、其中衆生悉是吾子」の二句のみを引くのに対し、江島縁起諸本にはこれに続く「而今此処多<sub>ニ</sub>諸患難<sub>一</sub>、唯我一人能為<sub>ニ</sub>救護<sub>一</sub>」の二句も引かれる。なお、『溪嵐拾葉集』を踏まえて撰述された群書類従本『竹生島縁起』にも、この偈文に基づく記述がある。

## ⑩『竹生島縁起』群書類従本（神道大系）

今是大神者、弁才天女、釈迦如来心跡、為<sub>三</sub>界於我有<sub>一</sub>、撫<sub>二</sub>四生於一子<sub>一</sub>。

## f 岩仁来島

【真名本】慈覚大師、諱<sub>二</sub>円仁<sub>一</sub>、俗姓壬生氏、下野国都賀郡人也、（中略）于<sub>レ</sub>時天女忽然雲上現前。其形端嚴微妙、八臂具足、左天女右童子侍立。天女発<sub>二</sub>妙音声<sub>一</sub>言説、我是安養世界主。出<sub>二</sub>彼宝刹<sub>一</sub>垂<sub>レ</sub>跡於此山。当<sub>レ</sub>知、擁<sub>二</sub>護國王及人民<sub>一</sub>、為<sub>下</sub>除<sub>二</sub>衰患<sub>一</sub>令<sub>上</sub>得<sub>二</sub>安穩<sub>一</sub>故。

【岩本院本】文徳天皇仁寿三年春二月、慈覚大師賢聖の玄蹤をたつねて、遼遠の東海に巡礼す、（中略）天女造次にして雲上に顕現す、其形微妙也。威容嚴肅にして八臂具足せり。左には天女、右には童子、侍立して圍繞せり。天女妙音声をこしてのたまはく、我はこれ安養世界の主也、彼宝刹をいて、跡をこの山にたれたり。当知、国王人民を擁護して、衰患をのそぎ、安穩をえしめむためなり。

【上之宮縁起】記述内容は岩本院本と同じ。

【溪嵐拾葉集】次慈覚大師籠<sub>二</sub>彼所<sub>一</sub>被<sub>レ</sub>行<sub>レ</sub>之。一度、観<sub>シテ</sub>天女ト、鷲峯教主也ト「云云」。一度、六臂天女ニテ安養、教主也ト「云云」。此御貌ヲ写シテ自ラ依テ号<sub>二</sub>大明神<sub>一</sub>。社ヲ構テ神事ヲ執行シ、国師ヲ請シ延<sub>二</sub>供養<sub>一</sub>。于<sub>レ</sub>今少シモ無<sub>二</sub>相違<sub>一</sub>「云云」。

「擁<sub>二</sub>護國王及人民<sub>一</sub>、為<sub>下</sub>除<sub>二</sub>衰患<sub>一</sub>令<sub>上</sub>得<sub>二</sub>安穩<sub>一</sub>」が④『金光明経』の四天王品を出典とすることは、役行者の箇所を確認したが、ここで再び同じ文が引かれる。ついで注目したいのは、真名本・仮名本の「安養世界主」・「安養世界の主」、「溪嵐拾葉集」の「安養教主」である。安養世界の主とは阿弥陀如来のことであり、ここでは阿弥陀如来を弁才天の本拠とする。また『溪嵐拾葉集』では弁才天が二度出現し、一度目は「鷲峯教主」、二度目は「安養教主」と称する。鷲峯の教主とは、すでに確認したように霊鷲山で『法華経』を説いた釈迦であらう。弁才天が同じ人物の前に二度出現しているのは諸本中でも『溪嵐拾葉集』のこの箇所のみである。

g 安然来島

安然の来島記事に本地説が含まれるのは『溪風拾葉集』のみである。

【溪風拾葉集】次安然和尚尋<sub>ニ</sub>覺大師跡<sub>一</sub>、籠<sub>テ</sub>彼島<sub>ニ</sub>被<sub>レ</sub>行<sub>レ</sub>之。二臂天女乘<sub>テ</sub>雲<sub>ニ</sub>現<sub>シ</sub>給<sub>ヲ</sub>テ、安養<sub>ノ</sub>教主也<sub>ト</sub>。「云云」。

h 良真の来島と渡宋・遷宮

良真についての記事は、真名本及び『溪風拾葉集』にはない。

【岩本院本】爰に慈悲上人良真、往昔の法式をとふらはんかために、勇猛精進の志を専にして修行する事一千餘日の間畢、(中略)爰天女壇上に現し、童子左右にはんへり、天女妙音声をいたして、上人につけてのたまはく、此壇所今代には聖天岩屋白狐石とかうす、又は一本松となつく。説一偈曰、昔在<sub>ニ</sub>靈山<sub>一名</sub>法華<sub>一</sub>、今在<sub>ニ</sub>西方<sub>一名</sub>弥陀<sub>一</sub>、濁世末代觀世音、垂<sub>ニ</sub>跡<sub>一</sub>宇賀弁才天<sub>一</sub>。(中略)仁禪師曰、汝不言知ぬ、我不聞に悟ぬ、日本国に補陀落の樓閣、彼島たるによりて、大慈大悲の觀世音垂跡、宇賀弁才天女あらはれ給、まことにこれ言語道断の靈地なり。(中略)、自爾以來、国土安穩当国繁昌其例稀也。彼島といふは関東宇賀神王の住所、本地釈迦如来・如意輪觀世音の化身、一切衆生の悲母。

【上之宮縁起】「靈地なり」までは、岩本院本にほぼ同じ。ただし、岩本院本で「慈悲上人良真」とあるところが、上之宮縁起では「慈悲上人栄西」となっている。岩本院本の「彼島といふは……」以降にあたる部分は以下の通り。

此島ハ是、海外万国の中の勝国、天産齋元の靈国たる日本国の根本神椿として、天神地祇靈意を一になし作りなせる神山也。又此天尊は極樂世界の教主無量寿世尊、娑婆世無畏者の如意輪大士の同体たる妙弁才天女にして、天照太神の異名たる富主姫の神にたまします、即是十方淨刹の諸仏菩薩の行母、三千世界一切衆生の福主也。

「昔在<sub>ニ</sub>靈山<sub>一名</sub>法華<sub>一</sub>、今在<sub>ニ</sub>西方<sub>一名</sub>弥陀<sub>一</sub>、濁世末代觀世音、垂<sub>ニ</sub>跡<sub>一</sub>宇賀弁才天<sub>一</sub>」の偈文は、数多くの仏典や文学作品の中にみられる、「昔在<sub>ニ</sub>靈山名法華<sub>一</sub>」に始まる偈のバリエーションの一つといえる。この偈の成立と、能樂へ取り込まれる過程を論じた高橋悠介氏の論考<sup>(16)</sup>に則り、偈文の用例を見てみよう。古い例には『沙石集』がある。

⑪『沙石集』巻四 無言上人事（日本古典文学大系）

古徳口伝云、昔、在<sub>二</sub>靈山<sub>一</sub>名<sub>二</sub>法華<sub>一</sub>、今在<sub>二</sub>西方<sub>一</sub>、無量寿、娑婆示<sub>二</sub>現觀世音<sub>一</sub>、大悲一体利<sub>二</sub>衆生<sub>一</sub>。「云云」。此文意、高野大師法花御開題ノ意ニ符合セリ。金剛頂經ヲ引テ釈給ク、妙法蓮華經者、觀自在王密号也。此仏ハ無量寿ト名付、淨妙国土ニシテハ、成仏ノ身ヲ現ジ、雜染世界ニシテハ、觀自在ト名付ト云リ。法花・弥陀・觀音一体ノ事、此釈分明也。尤信受スベシ。

偈の後半二句は江島縁起と異なる。なお、⑪が引く「高野大師法花御開題」は、以下の記述を指すと考えられる。

⑫空海『法華経開題』〔大正五六―一七三中〕

抛<sub>二</sub>金剛頂經<sub>一</sub>亦奉人名<sub>二</sub>妙法蓮華<sub>一</sub>者、斯乃觀自在王之密号也。則此仏名<sub>二</sub>無量寿<sub>一</sub>。若於<sub>二</sub>淨妙国土<sub>一</sub>、現<sub>二</sub>成仏身<sub>一</sub>。住<sub>二</sub>雜染五濁世界<sub>一</sub>、則為<sub>二</sub>觀自在菩薩<sub>一</sub>。

高橋氏が挙げる例のうち、覺鑿仮託の『孝養集』や、謡曲『高野物狂』『朝長』『道明寺』では、後半二句が「娑婆示<sub>二</sub>現觀世音<sub>一</sub>」<sub>(17)</sub>、三世利益同一體である。江島縁起のように三句目を「濁世末代觀世音」とするのは、延慶二年（一三〇九）に親鸞の弟子の顯智が記した『聞書』と、一六世紀前半の『法華経直談鈔』、一六世紀末の謡曲注釈書『謡抄』である。江島縁起の仮名本は、中世に広く知られていたこの偈文を取り込み、さらに宇賀弁才天信仰を盛り込んで四句目を「垂<sub>二</sub>跡宇賀弁才天<sub>一</sub>」としたものであろう。記事の末尾は、岩本院本及び江島神社本と、上之宮縁起とでやや異なる。岩本院本・江島神社本では、江の島を「関東宇賀神王の住所」とし、江の島弁才天の本地は釈迦如来・如意輪觀音とする。これに対し上之宮縁起は、阿弥陀如来・如意輪觀音・弁才天・富主姫（天照大神）という団体説を説く。如意輪觀音のみは岩本院本・江島神社本とも共通するが、他の仏神は共通しない。この団体説は、既に掲げた③『最勝護国宇賀耶頼得如意宝珠陀羅尼經』の、宇賀神將・阿弥陀仏・如意輪觀音・天照大神・ダキ二天・聖天・愛染明王という説を下敷きにしたものであろう。

二一三、江の島弁才天の本地

前項で確認したように、江島縁起諸本の各場面において弁才天が結びつけられた尊格を示すと、「表2」のようになる。

〔表2〕江島縁起諸本の各段における弁才天と他尊との習合

		真名本	岩本院本	江島神社本	上之宮縁起	溪風拾葉集
島の成立	無熱池龍王の三女	無熱池龍王の三女 閻羅大王の姉 婆蘇大天の妹	無熱池龍王の三女 閻羅大王の姉 婆蘇大天の妹	無熱池(阿那婆)龍王の女 閻羅大王の姉 婆蘇大天の妹		
役行者	釈迦	釈迦	釈迦	釈迦	釈迦	釈迦
泰澄						釈迦
最澄						釈迦
道智						釈迦
空海	釈迦	釈迦	釈迦	釈迦	釈迦	阿弥陀
円仁	阿弥陀	阿弥陀	阿弥陀	阿弥陀	阿弥陀	阿弥陀
安然						阿弥陀
良真 (上之宮 縁起では 榮西)		法華  弥陀  観音  宇 賀弁才天 釈迦  如意輪観音  宇 賀神王	法華  弥陀  観音  宇 賀弁才天 釈迦  如意輪観音  宇 賀神王	法華  弥陀  観音  宇 賀弁才天 弥陀  如意輪観音  弁 才天  富主姫(天照大 神)		

〔表2〕に基づき諸本を俯瞰してみよう。高名な僧の求めに応じて弁才天が顕現するという型に当てはまらない道智の(18)記事と、仮名本において追加された良真・榮西の記事を除くと、役行者から安然までの来島記事においては、弁才天の本地が釈迦如来・阿弥陀如来のどちらかである。かつ、本地は釈迦から阿弥陀へと移っていく傾向が見られる。このことは

何を意味するのであろうか。

阿弥陀と弁才天を結ぶ説がみられるものとして、③『最勝護国宇賀耶頓得如意宝珠陀羅尼經』がある。江島縁起諸本では、円仁から安然までの来島記事において、宇賀弁才天信仰の要素が明確に描かれることがほとんどない。しかし唯一、円仁の記事には、唐で円仁が宇賀弁才天の法を授かったという記述がある。唐の法全は、「宇賀弁才」という「諸仏已証秘法」があり、この法こそ「究竟摩尼輪」であるという。そしてこの法によって国土を安鎮せよと、円仁に法を授けるのである。真名本における円仁の記事は『慈覚大師伝』の文を多く引用し、入唐の記述も同書に拠るが、ここで「宇賀弁才」の法を円仁が授かるという内容は当然『慈覚大師伝』にはない。この記述については鳥谷武史氏が、「一三世紀以降、天部の重要性を語り、天部を中道の象徴とし、とりわけ弁才天を重視するといった教説が、円仁の伝記を改変、または注釈するかたちで語られていた」こと、また「究竟摩尼輪」の語が、宇賀弁才天法の次第を説く『最勝護国宇賀耶頓得如意宝珠王修儀』にもあることを指摘している。鳥谷氏は、この点および空海の来島記事<sup>19)</sup>から、真名本の制作に携わった人物が宇賀弁才天に関する知識を有していたことが推測されるものの、真名本に描かれる信仰自体は『金光明経』系のものであり、一三世紀後半以降の宇賀弁才天信仰とは一線を画しているとす。そして、宇賀弁才天信仰の要素が強く見られる『安然秘所記』を除く真名本の内容は、一三世紀前半までに成立し、後から『安然秘所記』が増補されたと推定する。鳥谷氏の推論に付け加える形でいうならば、真名本・仮名本における円仁の来島記事に見える、弁才天の本地を阿弥陀とする記述もまた、宇賀弁才天信仰の影響といえるのではなからうか。縁起全体の中で本地仏が複数あり、統一されていないこと自体は、後述する『溪嵐拾葉集』などに見えるような、弁才天の本地に関する多様な説を反映した結果と考えられる。

### 三、『溪嵐拾葉集』にみる天川・巖島・竹生島の本地

はじめに触れたように、『溪嵐拾葉集』巻三十七・紀州天川縁起事の末尾には、弁才天の霊場である天川・巖島・竹生



也。凡<sup>ソ</sup>以<sup>ニ</sup>此尊<sup>一</sup>、法花ノ十界皆成<sup>ヲ</sup>習也。

(中略) 又云、**宇賀弁財** **観音** **智<sup>ニ</sup>主<sup>ル</sup>也**。

**妙音弁才** **ハ** **音声ノ** **当体<sup>ナルカ</sup>故<sup>ニ</sup>**。所観<sup>ヲ</sup>境<sup>ニ</sup>主<sup>ル</sup>也。此観音妙音<sup>ハ</sup>共<sup>ニ</sup>本門流

通<sup>ノ</sup>現身說法<sup>ナルカ</sup>故。此尊<sup>ヲ</sup>本地<sup>ノ</sup>三身<sup>ト</sup>習事、旁有<sup>レ</sup>由哉<sup>「云云」</sup>。

⑭では、釈迦・薬師・弥勒を弁才天の本地仏とする説を『華嚴経』『大宝積経』の説によるものだとする。それらの経典にはもちろん、こうした弁才天の本地説はない。さらに「一義」として、虚空蔵・地藏・弥勒を本地とすることもあるという。

また、弁才天を妙音・宇賀の二種に分け、種子をそれぞれ**ミ**・**ウ**とする。そして宇賀弁才天は「観音所変」の弁才天だという。この分類を、⑬における天川・厳島・竹生島の三所と対応させてみたい。まず「妙音弁財」とされ、**図1**で種子を**ミ**とする厳島の弁才天は、⑭で宇賀弁才天と区別された妙音弁才天ということになる。また「観音弁財」とされた竹生島弁才天は、⑭が「観音所変」だと説く宇賀弁才天に該当する。竹生島宝厳寺は観音霊場としての性格も強く、千手観音を本尊とする観音堂は西国三十三箇所霊場の一つに数えられる。弁才天の島でもあり、観音の島でもある竹生島への信仰が、こうした記述に反映されたのであろう。

天川弁才天は「地藏弁天」とあるが、これはどのように解釈したらよいのだろうか。⑭では「恵心<sup>ノ</sup>先徳<sup>ノ</sup>御積」として、弁才天が天上では虚空蔵、地上では地藏だとする説、また宇賀神の三字を天・地・人と釈し、宇**(ミ)**を虚空蔵菩薩、賀**(カ)**を地藏菩薩の種子と説く説が見える。これらに則れば、天川弁才天は虚空蔵・地藏を本地とする宇賀弁才天であり、かつ地上に居るため、虚空蔵ではなく地藏だということになる。

以上をまとめると、⑬の説は、天川・竹生島を宇賀弁才天、厳島を宇賀弁才天ではない妙音弁才天としていることになる。但し、『溪嵐拾葉集』所収の説どうしは、必ずしも整合しているわけではない。とくに⑬の説は天川の縁起に付随するものであり、あくまで天川における伝承に過ぎないともいえる。<sup>20</sup>なお、『溪嵐拾葉集』には、弁才天(妙音天)と、『法華経』に登場する妙音菩薩との同体説が見える。妙音菩薩は後宮の女性などに変化して衆生を教化すると『法華経』では説かれ、女天である弁才天(妙音天)とも結びつきやすい。

⑮ 『溪風拾葉集』卷三十七 求聞持三字習事「大正七六一六二四上」

尋云。法花ノ中ニ説ク弁才天一耶。答。一義云、弁才天者又名「妙音天」。若爾者妙音菩薩是也。

もし、巖島の「妙音弁財」が単に宇賀弁才天との区別ではなく、妙音菩薩の変化を意味しているのであれば、天川・巖島・竹生島の（地藏・妙音・観音）とは、弁才天の本地にいずれも菩薩を配当していることになる。<sup>⑮</sup>

#### 四、造像にみる弁才天と他尊との習合

前節までは、文献に現れた弁才天の本地仏についてみてきた。本節では、弁才天と他の仏・菩薩・神との習合を、造像例からみていきたい。予め述べておくと、江島弁才天の図像として描かれたことが明確な図像はそれほど多くない。江島縁起の内容を描いたものには江島縁起の絵巻が、江島弁才天の像であることが作中に明示されるものには近世から近代にかけての刷物がある。<sup>⑯</sup>刷物に描かれた弁才天以外の尊格は、管見の限り、弁才天の眷属である十五童子と、大黒天・毘沙門天のみである（図2）。そこで本節では、より広い視野から造像例をみていきたい。なお、弁才天曼荼羅をはじめ、弁才天を中心として描いた図像において、弁才天の本地を示す例は、管見の限り確認できていない。これに対し、弁才天と団体関係にある尊格が共に表される例や、弁才天を構成要素にもつ複合的な尊格については、多くの造像例がある。こうした例のいくつかを挙げ、弁才天と他尊との習合がどのように表されたかを確認したい。

図2 藤沢市蔵「江島本宮石屋弁財天像」  
（「特別展 江の島」、遊行寺宝物館、二〇二一・七）



⑯守覚『御記』東寺夜叉神事「大正七十八一六一四上」

大師御入定後、於西御堂授檜尾僧都給条条有之。摩多羅神其一也。大師云、此寺有奇神一名夜叉神。摩多羅則是也。持者告吉凶神也。其形三面六臂「云云」。彼三面者三大也。中面金色。左面白。右面赤也。中聖天。左吒吉尼。右弁才也。每月十五日可供之。此神具大慈悲、不レ生怨害、除災与福。天長御記云、東寺有守護天等。稻荷明神使者也。名大菩提心使者神「云云」。

ここでは、聖天・ダキニ天・弁才天の三面を一体に持つ夜叉神を、摩多羅神と称している。またこの神は稲荷神の使いであるともいう。このような像は東寺に現存せず、現在、東寺の夜叉神堂に安置される夜叉神像は雌雄ともいわれる一対の夜叉像である。なお、宝寿院蔵『三天像』(図3)など、聖天・ダキニ天・弁才天の三面を持つ像自体には例がある。なお、比叡山常行堂にも、円仁が感得したとされる「摩多羅神」が祀られる。この摩多羅神は二童子を伴う和装の翁として描かれ、姿は東寺のものとは異なるが、『溪嵐拾葉集』常行堂摩多羅神事には、大黒天・ダキニ天との同体説が見え、東寺の摩多羅神と共通の原型を持った信仰が存在していたと考えられる。

また、中央に大黒天、左右に弁才天・毘沙門天の面を配し、二臂あるいは六臂を持つ三面大黒天像が、比叡山を中心に福神として信仰されている。この三面大黒天は、室町時代に東寺の摩多羅神の影響を受けて成立したものと彌永信美氏が指摘している。<sup>(23)</sup>

ダキニ天

弁才天との同体関係が表現された図像のひとつに、ダキニ天像が挙げられる。ダキニ天は元来インドの夜叉神で、仏教においては大

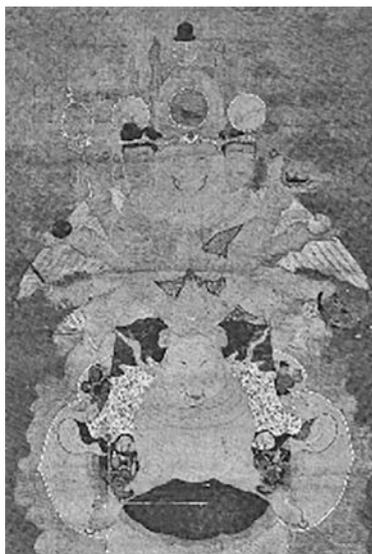


図3 宝寿院蔵『三天像』(長野市立博物館「狐にまつわる神々」、長野市立博物館、二〇一五・三)

黒天の眷属ともされる女天である。日本独自の姿として、ダキニ天あるいは稲荷神の像は、狐に乗り、剣と珠を持つ女神の姿で表されることがある。この女神は二臂の宇賀弁才天像と同じ姿であり、作例によっては宇賀神を頭上に戴くこともある。またダキニ天曼荼羅の中には、弁才天・毘沙門天・聖天などを含む多面多臂像で狐に乗る姿のものがある。この場合、周囲に弁才天の眷属である十五童子が描かれたり、ダキニ天あるいは乗っている狐の手足に蛇が巻かれることが多い。像の構成要素の中で弁才天に由来するものが大きい。

**堅牢地神**

堅牢地神は、弁才天と同じく『金光明経』『金光明最勝王経』などに説かれる護法善神で、經典が説かれる場所において大地の恵みをもたらすことが説かれる。また、十二天の一尊である。『注好選』・『今昔物語集』には、「虎の威を借る狐」が最終的に堅牢地神となる説話がある。詳しくは拙稿<sup>(26)</sup>で論じたが、簡単に紹介する。

⑰東寺観智院本『注好選』下巻「狐ハ仮虎威第卅三三」（新日本古典文学大系）

撰寿経云、乃往過去宝幢仏、時有レ国、名ニ出婆国。有レ山、名ニ祐陀山。其山ニ有レ一狐、名ニ地徳。一。假テ二虎、威ヲ、一切ノ禽獸ヲ令ニ怖畏。〔中略〕今仙人以ニ慈悲ニ授記云、汝命終

後、尺迦世成ニ菩薩ニ得ニ名。一云ニ大弁才天、二名ニ堅牢地神。

□八万四千鬼神為ニ士卒、一切衆生与レ福。授記了テ忽隱ス。尔時仙人

文殊是也。狐者堅牢地神是也。此菩薩、高千丈九億四千鬼神以為レ伴。

有ニ二手一。二手ハ合掌、六手印鑑ト・鎌ト・鉞ト等ナリ持。一切衆

生ニ五穀ヲ作テ与ル者也。仍一念ノ菩提心不可思議也。

狐は釈迦仏の世で菩薩となり、「大弁才天」と「堅牢地神」の二つの名を得るのだという。つまり、弁才天と堅牢地神とが同体とされる。また堅牢地神の姿について、八臂で「印鑑・鎌・鉞・鉞」などを持つという。堅牢地神（地天）は通常、二臂で花を盛った鉢、あるいは水瓶を持った女天

文献と造像にみる弁才天と仏・菩薩・神との習合

図4 『覚禅抄』地天法

（大正新脩大藏経図像部五）



の姿で描かれるが、一部の図像に、四臂で農具を持つ女神形のものがある（図4・5）。  
 図には、弁才天像と同じだという書き入れがあり、弁才天像をもとに持物を変えて作られたものと考えられる。

**大黒天・毘沙門天**

弁才天と大黒天・毘沙門天が結びついた例には、先に述べた三面大黒天が挙げられるが、弁才天の図像においても、共に描かれる頻度が最も高いのが大黒天、次いで毘沙門天であること、またどちらも宇賀弁才天信仰の流れを受けたものであることが、鳥谷武史氏により指摘されている。<sup>(26)</sup>

大黒天を中心にした図像では、走り大黒天と呼ばれる像で、大黒天（大国主と習合し、袋を持った姿で造られる）の持つ袋の中に八臂弁才天と十五童子、そしてダキ二天とみられる女神が描かれる（図6）。

ダキ二天や四臂堅牢地神の造形には、弁才天または宇賀弁才天の要素が強く表れている。これは、弁才天像が早くから作られ、その姿が広く浸透していたため、新しい尊格を造像する上で土台となつたためであろう。このことは、中世日本の天部信仰において、弁才天及び宇賀神が重要な位置を占めていたことをも示すものといえる。

竹生島や天川の弁才天像・弁才天曼荼羅には、弁才天の眷属である十五童子の他に、弁才天と団体説のある大黒天や荒神など様々な仏神が画面中に描かれる。天川弁才天においては、中世に、人身に三つの蛇頭を持つ十臂弁才天の像が成立し、その周囲には十五

図5 寛信『伝受集』巻三

〔大正七八―二四三下〕



図6 個人蔵『大黒天像』（長野市立博物館『狐にまつ

わる神々』、長野市立博物館、二〇一五・三）



童子・大黒天に加えてダキニ天信仰に由来する狐などが描かれる(図7)。近世から近代にかけて刷られ、数多く流通した「竹生島出現之図(竹生島出現尊像とも)」(図8)には、弁才天が九頭龍の上に乗っていることや、雲の中に四天王・韋駄天その他の護法神が数多く描かれることなど特徴があるが、中でも特異な点は、四天王が持物などの特徴から、中国で近世以降に発達した像容に近いといえること、四天王の毘沙門天とは別に、宝塔を持った毘沙門天(托塔天王)がいることである<sup>(27)</sup>。弁才天とともに

多様な尊格が描かれるこれらの例に対して、本節の冒頭で述べたように、近世の刷物を中心とした江島弁才天の図像に描かれるのは、弁才天のほかは眷属である十五童子と、大黒天・毘沙門天のみである。なぜ、弁才天と結び付いた多くの尊格が描かれないのだろうか。また、謡曲などで江島縁起の物語は広く知られていたにも関わらず、縁起の内容を反映した図像が造られなかったのはなぜなのだろうか。

これに答える仮説の一つとして、近世の江の島が、江戸などから多くの人々が訪れる行楽地であったために、教説や習合関係が図像に表されなかった可能性を提示したい。そうした来島者に頒布される刷物

図7

能満院蔵「天河弁財天曼荼羅図」  
(長野市立博物館「狐にまつわる神々」、長野市立博物館、二〇一五・三)



図8

早稲田大学図書館ゴールドン文庫蔵「弁財天及び十五童子像」



においては、先述したように弁才天との繋がりが強く、かつ福の神としてよく知られた大黒天・毘沙門天が描かれたのである。

## 五、結び

小稿では、弁才天と諸仏・菩薩との習合および団体説について、江島縁起を起点として、文献と造像例から検討し、次の二点を論じた。

まず、江島縁起の本文から、弁才天の本地説を検討した。江島縁起諸本において、道智・良真および栄西を除く高僧の来島記事では、弁才天の本地がみな釈迦如来・阿弥陀如来である。また、役行者から安然までの流れにおいては、本地が釈迦から阿弥陀へ移っていく傾向が見られる。弁才天と阿弥陀の結びつきは、宇賀弁才天関係の疑偽経典である『最勝護国宇賀耶頓得如意宝珠陀羅尼經』において確認できる。弁才天の本地を阿弥陀とするのは、宇賀弁才天信仰を受けたものと考えることが出来る。また、『溪風拾葉集』における天川・巖島・竹生島の三所弁才天説を、同じく『溪風拾葉集』の「本地事」の記述に照らすと、天川⇨地蔵・竹生島⇨観音は宇賀弁才天、巖島は妙音弁才天と分類することができる。

次に、図像に現れた弁才天と他の仏・菩薩・神との習合関係について概観し、江の島における図像について考察した。弁才天の図像にその本地を描く例は、管見の限り確認できない。一方、ダキニ天や堅牢地神など、弁才天と団体関係にある尊格の像には、弁才天の姿で造像されたり、弁才天の要素が強く表れた形で表現されるものが多く見られる。これは弁才天像が早くから造られてその後の造形の基礎となったこと、そして中世日本の天部信仰において、(宇賀)弁才天が重要な位置を占めていたことを示すものである。また、江の島弁才天の図像には、天川や竹生島と異なり、弁才天の眷属である十五童子と、大黒天・毘沙門天しか描かれない。この理由として、観光地となっていた近世の江の島では、刷物において、福の神としてよく知られ、かつ弁才天との関連が強い大黒天・毘沙門天のみが描かれたことが考えられる。

これまで、江島縁起における弁才天の本地説については、本文に即して詳細に論じられることがなかった。小稿によつ

て、縁起本文に現れた弁才天信仰の解明に僅かながら歩を進めることができたものと考ええる。竹生島や天川・箕面などの、弁才天信仰を伝える他の寺社縁起においても、弁才天の本地がどのようにに説かれているかという点に着目し本文を分析することで、中世日本の弁才天信仰がどのようにに共有され、あるいは寺社ごとに独自の発展を遂げたのかを明らかにすることができよう。

また、江島縁起では弁才天の本地に阿弥陀如来や釈迦如来が充てられ、『溪嵐拾葉集』でも各地の弁才天に仏・菩薩が配当されているが、弁才天の本地を圖像で表した例は確認できない。神道曼陀羅のように神社の神を本地仏の姿で表すものと異なり、もともとから仏教の天部である弁才天は、如来や菩薩がその本地として説かれながらも、圖像の中に本地説が表現されなかったものと考えられる。<sup>28)</sup>

〔付記〕 小稿は二〇二二年一月三〇日、早稲田大学多元文化学会二〇二一年度秋期大会における口頭発表を基に成稿したものである。

〔注〕

- (1) 中世以後「弁財天」とも表記されるが、本稿では資料中の用例を除き「弁才天」に統一する。弁才天に関する主な研究には、喜田貞吉『福神研究』、日本学術普及会、一九三五・九、根立研介『吉祥・弁才天像』（日本の美術三二七）、至文堂、一九九二・一〇、田代有樹女「佛教における女神像の位置（一）辯才天」（『名古屋造形芸術大学名古屋造形芸術短期大学紀要』第一号、一九九五・三）などがある。
- (2) 『大日経』およびその註釈では妙音天・美音天などとも呼ばれ、弦楽器のヴィーナを弾くことが示される。ヴィーナは琵琶に相当する。
- (3) 鳥谷武史「中世における宇賀弁才天信仰の研究―叡山と「江島縁起」―」、博士論文（金沢大学）、二〇一七・三。
- (4) 田中貴子「足引宮」転生―「厳島本地」における主人公の復活・吉祥天から弁才天へ」（『国文学攷』第一〇五号、一九八五・三）、「外法と愛法の中世」（『デイヴィニタス叢書四』）、砂子屋書房、一九九三・六；「外法と愛法の中世」（平凡社ライブラリー五七二）、平凡社、二〇〇六・三。
- (5) 山本ひろ子『異神―中世日本の秘教的世界』、平凡社、一九九八・三；『異神―中世日本の秘教的世界』上・下（ちくま学芸文庫）、筑摩書房、二〇〇三・六―七。
- (6) 中島彩花「中世弁才天曼荼羅にみる神仏の化現―天川弁才

- 天図像を中心に」(『女子美術大学研究紀要』第三十九号、二〇〇九・三・同「天川弁才天曼荼羅における蛇頭人身弁才天像について」(『女子美術大学研究紀要』第四十二号、二〇一三・三)。
- (7) 田中亚美「狐と堅牢地神―日本における〈狐仮虎威〉説話の受容と『撰寿経』」(『文学研究科紀要』第六十六輯、二〇二一・三)。
- (8) 田中亚美「『江島縁起』の諸本と研究史」(『アジアの文化と思想』第二十九号、二〇二一・三)。
- (9) 近世に江の島全体を支配した別当岩本院が廃され、現在は旅館岩本楼となっている。
- (10) 〈藤沢市史編さん委員会一九八〇〉、鎌倉市教育委員会・鎌倉国宝館編『鎌倉の絵巻Ⅱ(室町時代)』(鎌倉国宝館図録第二十六集、鎌倉国宝館、一九八七・九)。
- (11) 向坂卓也「相州得瑞嶋上之宮縁起について―翻刻と紹介」(『金沢文庫研究』三一九号、二〇〇七・一〇)。
- (12) 『大正新脩大藏経』第九卷三五頁中段。以下同様に略記する。なお梵字については、SAT大正新脩大藏経データベースの文字画像を引用した。
- (13) 注(4) 論文参照。また、『正(聖)法輪藏』をはじめとした、文保本と総称される聖徳太子伝の一部には、太子三十一歳の記事に巖島の縁起が記されるものがある。そこでは龍王に四人の娘がいて、長女を『法華経』の龍女、次女を巖島、三女を竹生島、四女を江島とする。文保本については、阿部泰郎「『聖徳太子伝』『弘法最初弘仁伝』『松子伝』解題」(国文学研究資料館編『聖徳太子伝集』(真福寺善本叢刊第二期第五卷)、臨川書店、二〇〇六・三) 参照。
- (14) 善如龍王は「善女龍王」とも表記される。善如龍王についてはステイブン・トレンソン『祈雨・宝珠・龍―中世真言密教の深層』、京都大学学術出版会、二〇一六・三、藤巻和宏『聖なる珠の物語―空海・聖地・如意宝珠』(ブックレット〈書物をひらく〉一〇)、平凡社、二〇一七・一参照。
- (15) 『合部金光明経』巻二・四天王品「大正一六一―三八二中」にも同文。
- (16) 高橋悠介「能楽に撰取された法華・阿弥陀・観音融和の偈句―昔在靈山名法華」偈の源流と展開」(前田雅之編『画期としての室町―政事・宗教・古典学』、勉誠出版、二〇一八・一〇)。
- (17) 『聞書』はこの偈文を「観音悲華経言」として、『法華経直談鈔』『謡抄』は南岳慧思の言葉として引く。
- (18) 道智の来鳥記事は、道智に食を供養する龍女がどこから来るとのかわかると、衣服の裾に付けた糸を辿って龍窟にたどり着いたが、龍女の怒りを買ってしまうという話である。
- (19) 真名本における空海の来鳥記事に『金光明最勝王経』の弁才天を讃嘆する偈文が引用されながらも、その中の弁才天の持物に関する記述が真名本では削除されている。鳥谷武史氏はこれについて、真名本撰述者は、この場面の弁才天を『金光明最勝王経』とは持物の異なる宇賀弁才天として描きかかったために、具体的な持物の描写を削除したものと推測する。

注3 論文参照。

(20) 『溪嵐拾葉集』における厳島弁才天については、藪元晶『溪嵐拾葉集』の厳島弁才天について(『久里』第三十八号、二〇一七・一)参照。藪氏は、『溪嵐拾葉集』の弁才天縁起が、

天川縁起を最初に置くのは、<sup>⑬</sup>で天川を「日本第一の弁財天」とする説に基づき、天川を最も重要と位置付けたことに因ると見ている。また、『溪嵐拾葉集』の厳島の記事には弁才天のことが記されない理由を、光宗が弁才天の記事を求めながらも得られなかった、即ち当時の厳島神社では、厳島明神を弁才天とする資料がなかったからだと推測する。そして、厳島弁才天の記事が天川縁起の中の<sup>⑬</sup>と、竹生島縁起の後に記された六所弁才天の二箇所であること、六所弁才天もまた天川を筆頭にしていることから、『溪嵐拾葉集』における厳島弁才天の説は天川の資料に拠るとする。これに加えて、一三世紀末成立と考えられる『金峰山秘密傳』では日本の弁才天霊場の第一を天川、第二を竹生島、第三を江島、第四を厳島とすることから、厳島における弁才天信仰は、『溪嵐拾葉集』成立時点では、厳島の外部で唱えられたものであったと論じる。

(21) 濱中修氏は、『平家物語』長門本・四部合戦状本において建礼門院が妙音菩薩の化身ないし垂迹とされていることについて、妙音菩薩が弁才天のみならず、文殊菩薩のことでもあったことを指摘し、龍女Ⅱ厳島明神の変化である安徳天皇を成仏へと導く建礼門院に、文殊のイメージが重ねられたことを指摘する(『濱中修「建礼門院妙音菩薩考」』、『国士館人文学』第

五号、二〇一五・三)。

(22) 江島神社奉安殿にある八臂・二臂一体ずつの弁才天坐像や、室町期の作とされ、大黒天・毘沙門天に加えて恵比寿が描かれた藤沢市所蔵の『弁財天十五童子像』(図9)など、江の島とその周辺に伝来した弁才天像は、江島弁才天として造像された可能性が十分に考えられる。ただし、江島神社の八臂・二臂像はそれぞれ一般的な宇賀弁才天像・妙音弁才天像であり、弁才天単体であるため他尊との習合関係は読み取れない。また明確に江島弁才天と示されていない図像は、本稿では考察の対象としない。なお、近世から近代にかけて刷られた護符には、「江島大神」として、弁才天の姿ではなく日本の女

図9

藤沢市蔵『弁財天十五童子像』

(特別展「江の島」、遊行寺宝物館、二〇二一・七)



神の姿で描かれたものもある。

- (23) 彌永信美『大黒天変相』(仏教神話学Ⅰ)、法蔵館、二〇〇二・四。

- (24) 「ダキニ」の表記は荼吉尼・吒枳尼など複数あるため、ここではカタカナに統一する。

- (25) 田中亜美「四臂堅牢地神の形成と『撰寿経』」(『印度学仏教学研究』六十九卷第二号、二〇二一・一)、注(7) 論文参照。

- (26) 注(3) 論文参照。

- (27) 中国における四天王像については、二階堂義弘「明清期における四天王像の変容」(『明清期における武神と神仙の発展』、関西大学出版部、二〇〇九・二) 参照。

- (28) 弁才天の本地は描かれないが、神の本地としての弁才天が描かれたものが、各地の弁才天の図像であるということもできる。江島明神の刷り物を例にすれば、江島明神の本地として弁才天が描かれていることになり、神道曼陀羅と同様の構造である。

## On the Relationship between Benzaiten (Sarasvati) and Buddhas, Bodhisattvas, and Deities: From the Enoshima-Engi

TANAKA Ami

First, from the text of Enoshima-Engi 江島縁起, I examined the theory of the true form of Benzaiten 弁才天. In the various books of Enoshima-Engi, the true form of Benzaiten is Shakyamuni Buddha and Amitabha Buddha. The connection between Benzaiten and Amitabha may be based on the belief in Uga-Benzaiten 宇賀弁才天. In addition, regarding the three Benzaiten: Tenkawa 天川, Itsukushima 厳島, and Chikubujima 竹生島 in the Keiran-Shuyoshu 溪嵐拾葉集, it can be said that the Benzaiten of Tenkawa and Chikubushima are Uga-Benzaiten, but Itsukushima isn't.

Second, the iconography on Benzaiten, especially Enoshima, is reviewed. There are no examples of Benzaiten images depicting its true form. On the other hand, there are many images of deities such as Dakini 吒枳尼天 and Pṛthivī 堅牢地神 that are created with the elements of Benzaiten. This indicates that the images of Benzaiten became the basis for subsequent images, and that (Uga) Benzaiten occupied an important position in medieval Japan. In addition, the images of Enoshima-Benzaiten depict only Benzaiten, Jugo-douji 十五童子, Daikokuten 大黒天 and Bishamonten 毘沙門天. It may be that only well-known deities of good fortune were depicted in the prints in the early modern period, when Enoshima was a tourist attraction.

In the Enoshima-Engi, Shakyamuni and Amitabha are assigned as the true forms of Benzaiten, and in the Keiran-Shuyoshu, various buddhas and bodhisattvas are assigned to Benzaiten, but there are no examples of the true forms of Benzaiten represented. Unlike Shinto mandalas 神道曼陀羅, in which the deities of shrines are represented as figures of buddhas and bodhisattvas, Benzaiten, which was originally deva, was represented in its own form.